青灣茶話

下

482

787
.02

1050

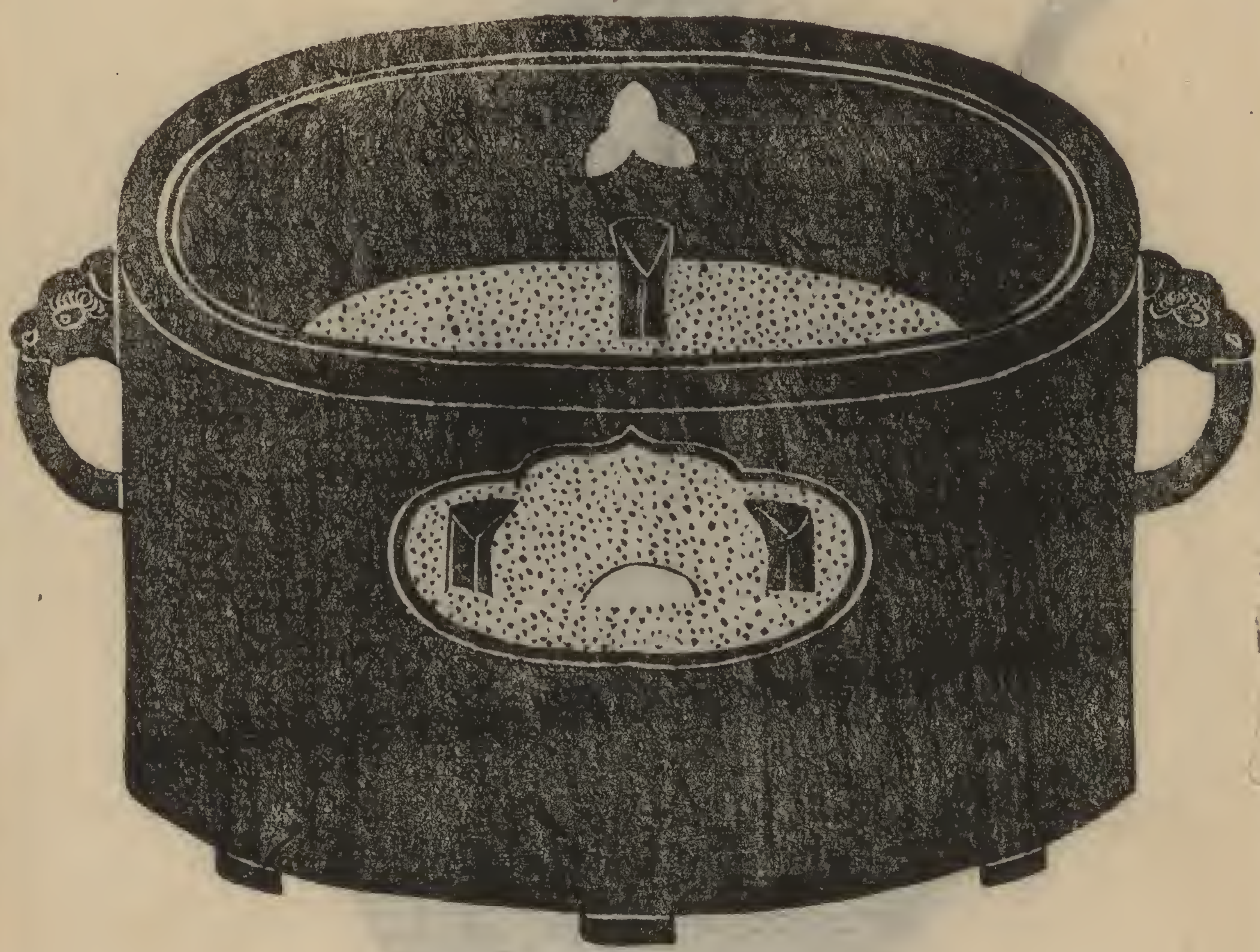
青灣茶話巻之下目錄

水注
茶咢
焙鈎
炭斗 瓢
茶注
包育
火管 羽扇
瓢杓
器局

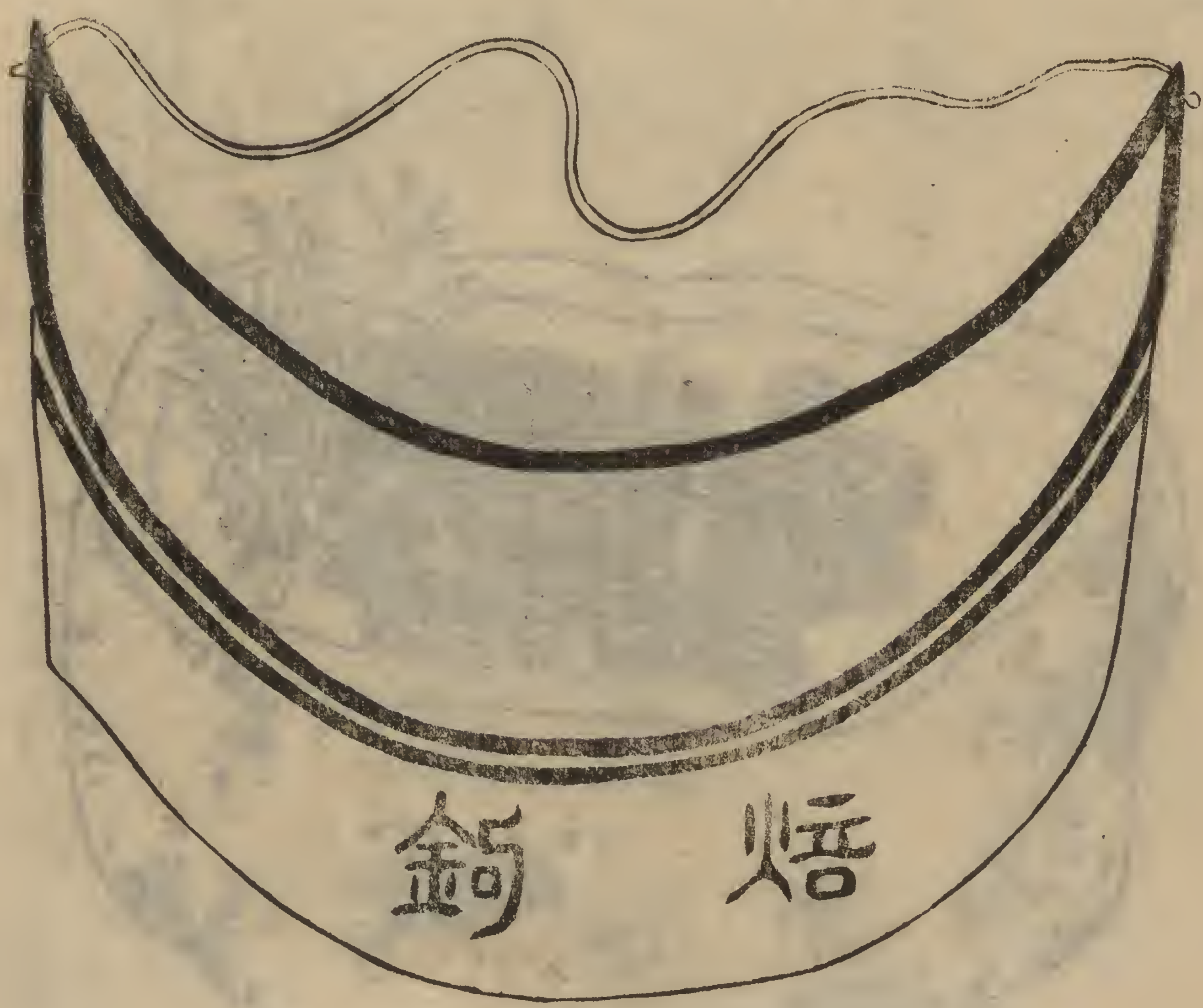
建城
器具銘
茶品彙
名水品彙
論水
水輕重

水注

茶閂



焙鉤



炭斗

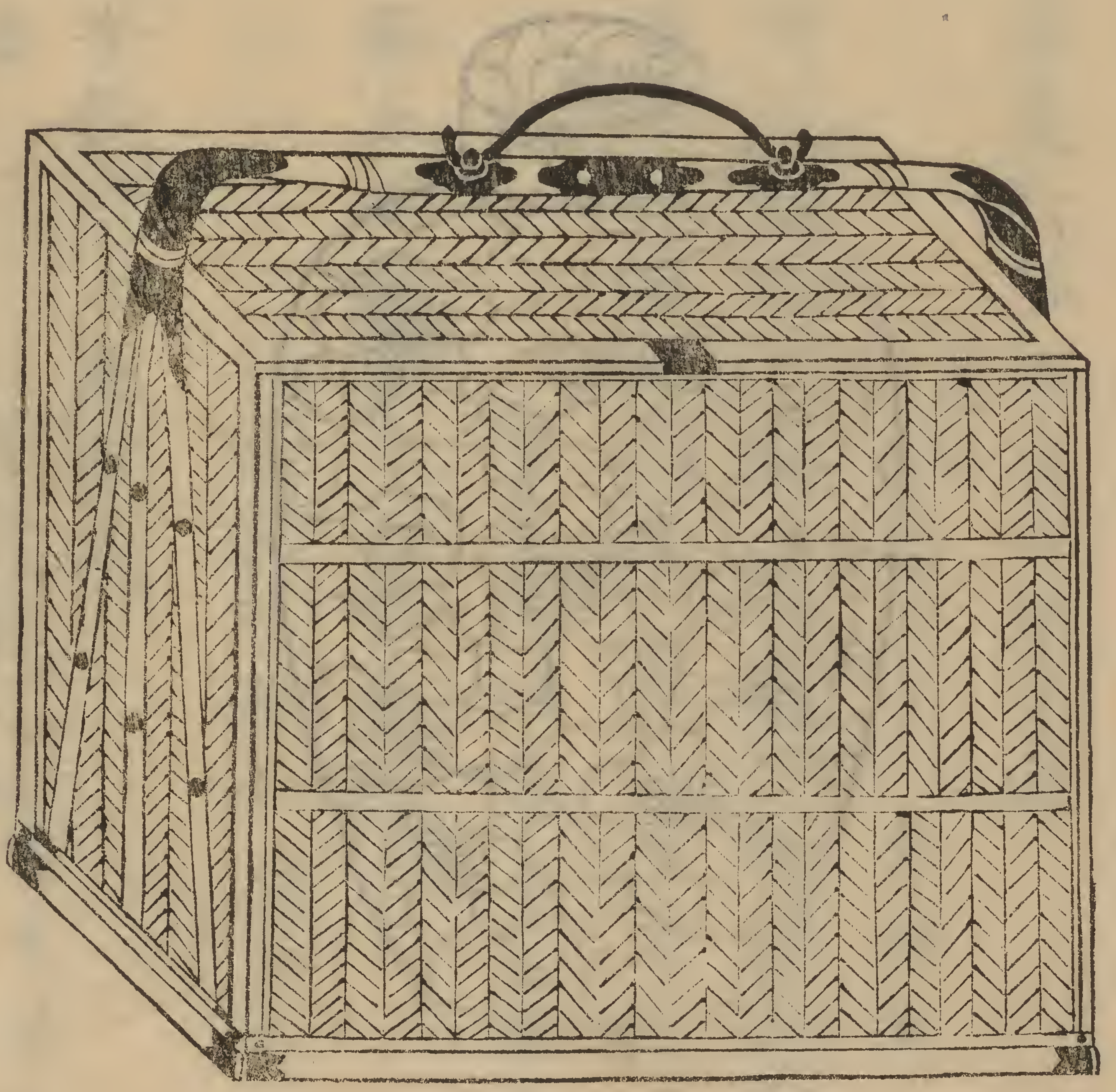
茶注 遊外居士銘

包肓

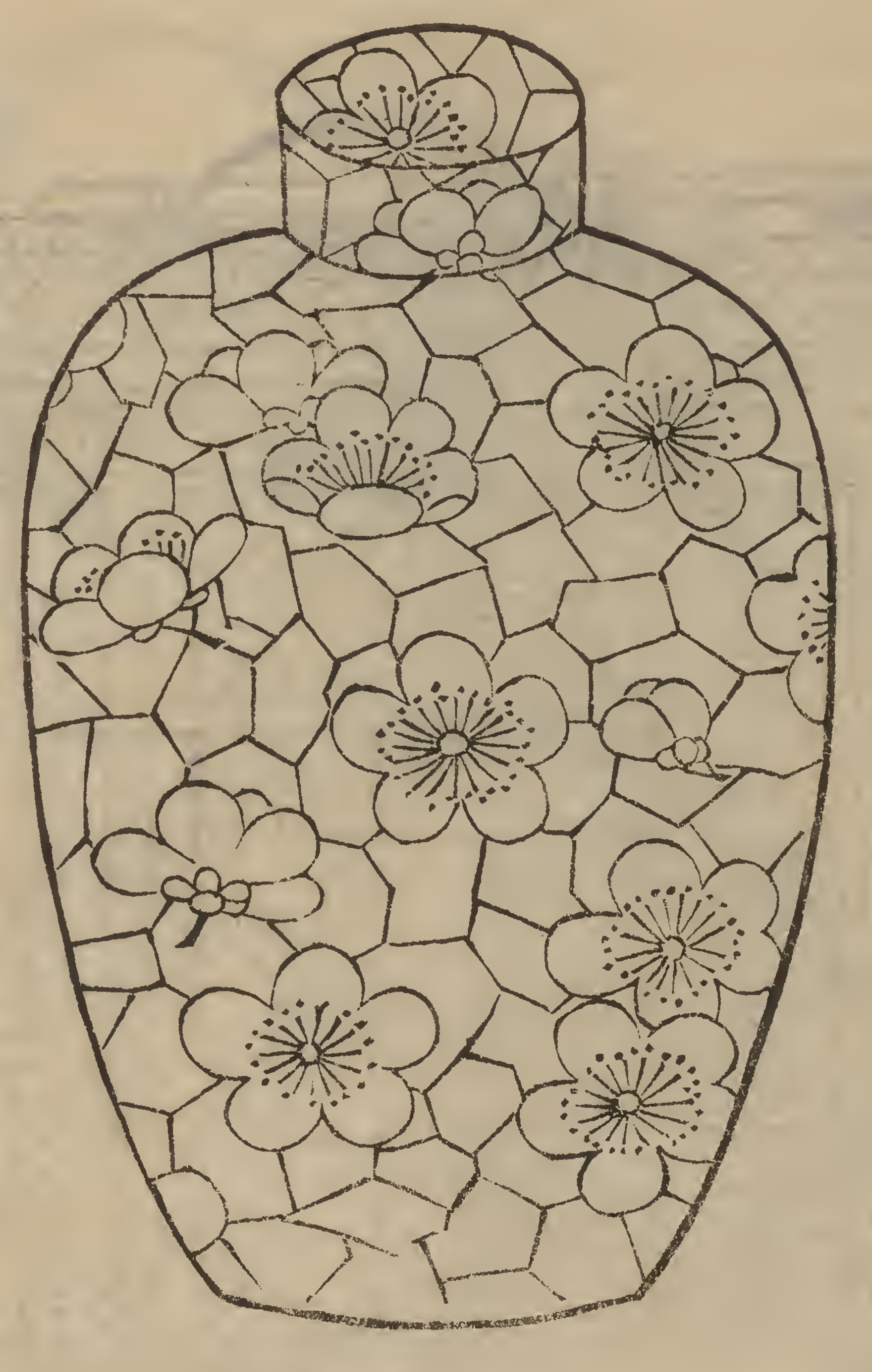
火管　羽扇

瓢杓

器局



建城



水注銘　参政滕宣季卿

提梁銅器、貯恵山泉、數碗洒處、冷徹茶涎、

茶罌銘　朝鮮國典籍學士仁則矩軒

三峽之水、烹以文火、瞠後一碗、吾今衷我、縷烟繞簷、圖書如画、不平之鳴、有時澎湃、碨磊之胷、一呑可化、

包育銘　埜堂顯杜多　日初禅師

空腹高心、皮下無血、能養妄火、與我同轍、

焙鈎銘　高遊外居士　賣茶翁

去其濕、取其乾、半鈎素月懸雲上、

炭斗造瓢銘　東湖散人　相國寺慈雲菴

無用之用、率性斯宜、克守其黒、式緝其熙、

火管銘　嵓信四川

頑固炭子、吹覚無明、度生高客、何若管兄、

羽扇銘　同

鵬鳥搏去、南溟起波、

瓢杓銘　同

許由高捨、吾拙楽之、長流無心、汲起漣漪、

建城銘　三山董柯亭華人名密

雪乳珍藏　四字名

春壺銘　姑蘓沈草亭華人名璠

美哉此壺、非玉非金、非寶非晶、收貯龍團、包涵鳳茗、貿吐梅花、體遠氷紋、凝藏元氣、保蓄天眞、華筵不雜、騒幟相親、盧仝注受、陸羽交神、

浪華雅士寶此如珍、欲索予是銘、時己巳仲冬于長崎舘、著古茶壺銘、

品司銘　嵓信四川

籠傍湘竹、織成波文、建城數撲、一鎖清羃、

通仙局銘　仝

曾攝茶具、遠伴蹐青、滌煩令爽、當通仙靈、

風爐銘　行省收　仝

周轉自在、從月因風、活火煎動、白雪丹擁、

火管銘 三言　　嵒信四川

待彪嘯、有翟生、一線竅、發松聲、

水注銘 納行省　　仝

江山甘泉、帶落茶波、和秋光呑、自濺俗習、吾沁枯腸、朱門莫入、

焙弦銘　　仝

出花間、半輪光、不借手、發芳香、

烏瓢銘　　仝

胡蘆腹裡、松卵烏銀、雅素天造、用來催春

提籃銘 二句　　仝

間人一歳忙花月、茶具半肩對石泉、

又 二句　　仝

收山水奇觀、吸嵓壑秀氣、

風爐外匣銘 六言二句　　仝

六合匣中含靈、一圓窗裏葆光、

茶銚銘　　仝

三足俯地、一流迎天、清薰透銚、轉簇雲烟、

注子銘　　仝

誰謂漏逗、持而守之、大口不語、冷暖自知、

提盤銘　仝

盤納須弥、銚朝四海、飢食渇飲、㐬翁無待、

火管銘　仝

空洞無物噓破闇来、甲方飛揚、其徳勇哉、

茶品彙

蘭茶　珠蘭茶といふハ古ものに蘂添来茶第一珍品湯の器より入来る掛目をもて経つてあり

松蘿　船来の茶の内蘇州閶門より来るといふ書付あり其中に来る挑巖秋不舟所擬松蘿といふ書付にて序曰唐有名僧号曰松蘿為喜烟霞隠居山野云々此人の始て製造茶なりと故に其名をいひしといふより始終此茶をそなふる可し考

武夷　此茶武夷の白茶とて色ハ黒く白きさゞびのやうなるものある此ふてきくあり香よろしき茶にハあらずされども船来のものなり此茶のことは諸書に出ずれども八香あり不挙

唐茶　すべて多く船来あるものなり紀州ニ製ス

一ッ山　雁音　山吹　初緑　湖溪　越後　初山吹

春風　喜撰　政所　龍田　一ッ森　冬梅　折鷹

朝日山　政所初葉

右拾六種江州信楽より産し日東茶葉此産第一とし茶葉ハ以宇治ヲ第一とし

花橘　江州彦根より八里ばかりにて京村源四郎といふもの近年製出すところなり

莖茶　城州宇治産蒔茶の莖也

室生(ムロフ) 大和産　清見 駿河産

服部 伊賀産　河越 武州産

仙霊 播州栗賀生蓮寺産　霊玄院法皇ノ御勅名

本葉　薄葉 已上両種城州高雄山ノ産日本茶ノ始テ産ル所ト云

草山　高泉寺　明石 已上三品丹後ノ産

足久保 駿州産　吉野茶 和州産

北山茶 和州産　川俣茶 勢州産

高野茶 紀州ノ産以テ浪華ノ水ヲ烹レハ甚悪シ山水ニ宜シ　日向茶 疏茶也無ニ精製者一

完粟茶(シソウ) 数品 播州産　カナコレキ 豫州宇麻郡産

相樂茶 肥前産　筑後茶 上品

輪違 濃州茶　葉室 城州醍醐産

名水品彙

賀茂御手濯川 城州洛外下賀茂社流水斯泉華洛第一ノ水とりわけ別して烹茶によろし其水甘く冷なり

菊水 京祇園下河原にあり水甚淡く茶の可否大によろしきなりと賀茂の水にハをとれり

明星水 吉田にある井水なり菊水に同し 以上三ツ洛中にたかく名水といふ由なり

飛鳥井 京二条小あかる　少將井 大炊御門南

手水井 四条烏丸　柳之水 西洞院三条通東側人家内

醒井 佐女牛通六條北　常盤井 武者小路新町西北方

清和水 一条堀川東　晴明水 上ニ仝

杜鵑井 油小路通中立賣下ル東側人家内

右洛陽洛外大概之分挙之

合坂水　天王寺西門之西湧泉也
浪華第一之水
又云今用逢坂字誤也其処有合坂辻用此字可也

在栖清水　新清水寺下湧泉柳之水
雖波村の井水也

難波水　南瓦屋町井水
愛宕水　内久寶寺町井水

黄金水　御城内井水
淀川　長流水

右大坂近邊之名水也

論水

本邦論名水書余未見世上茶家者流の口決ニ云千阿弥
利休山城宇治川の橋三の間瑞水日本第一の水と定む
豊臣太閤常ニ汲ミて茶の水に用ひらるといふ至今彼橋

汲取所ニて游もしたりしとぞ利休が末流片桐石見守貞
昌この水を汲秤量二十拵目をはかりて盈を作り今
点茶家者流に伝へ合杓といふ余これを伝へ諸方
の水を量るに量大概は性に従ひ捲るに水性をしりて好
悪を論しける山水乳泉石池の類にはおもさあり雑
様混合して流る川に性さあることを捲るに長流
水を取ることも濁字おもさえの水性し乳泉の類すくなく
只今名同地中より出るおもさは其の水は清かにして逼
世取是よく悪さ不行しに長流水性しよくなく母
なき行しまで水は只性をよく守べからず只出不合て

よくさ味ありけれよし　鹹ある金気あり古気なり濃
き味ある者のもの悪しといふべく甘き水を好むべし又按ず
るに京泉名泉の定むる所ハ只水性の善悪の撰ミ出の為ならず
ハあるまじ只京ハ事柔の為なるべく水を上るものは名の善悪
を汲ハ々是の事と見られ考ふべし

遵生八牋曰源泉ハ必重而泉之佳者ナルハ尤重餘杭徐隠翁嘗テ為ニ余言フ以テ鳳凰山泉ヲ較ルニ阿姥墩百花泉ニ便不ルレ及ニ五泉ニ可レ見仙源之勝ルコヲ矣この説よく按ずるに坂中石ありより
ある活水ハ重く其流のもの是れハ水のよくまとうるし売り
まとバ重くさり悪しくさりとも行しく軽くさら極てよし
いとも定りがたし初めより論ずべし

水軽重考

金城中黄金水　二十目八分
冽寒泉　二十目五分　余宅茶井也
有馬鷹塚清水　廿一匁六分　石泉極上ミ甘
舟坂清水　有馬道極上ミ甘
瑞寶寺水　有る京口之用水　廿一匁四ト
大坂愛宕水　廿一匁五分
在栖清水　同所清水本ト下
京下河原菊水
淀川水　十九匁四分
有馬湯山　一ノ湯同水廿一匁二分　二ノ湯同水廿一匁二分五重
亀尾瀑　廿一匁五分　水至極悪し
宗悟川水　名水といふ生駒川東小川　舟坂ニハ不及
同所瀑泉　廿一匁外不至
合坂水　大坂天王寺西
維波椚水
京杜鵑井

加茂手濯水　　明星系

此外本邦國志郡志に挙る所の名水多しといへとも方角を
定る人ハ自ら識て用んも博雅の一助ならんのミ

青灣茶話巻之下終